昆虫採集の思い出

坪田義正

不死鳥福井のシンボルとして、夜星に輝く白亜の殿堂、郷土自然科学の粋を集めて、他県の同人達から羨望の眼で見つめられて、２０年の歴史を繰り開げている。

郷土博物館の今昔を偲ぶとき、感無量のものがある。当初のスタッフも泉下の人と変わった者もある。追悼の念を改めてもちつゝ筆をとる。

時の市長熊谷太三郎氏の敗戦と震災に身心共に打ちひしがれた市民を、不死鳥の如く立ちあがらせる意図と教育復興のため、福井復興博覧会が盛大に挙行され、その会場として一つは福井大学の建造、そして今一つは自然愛護と市民の憩の場として足羽山古墳群の中に位置する三段広場に、県内の自然科学の領域を網らした博物館が作られた。その準備期間一年と限定され、あわただしさの中に昆虫部門では、偉大なる教育者故塩田玉喜春山小学校長を中心に、故井崎市左ェ門氏と私の三人で発足する。想えば、昭和８年の陸軍特別大演習に、今上天皇が行幸された時、県下小中学校は勿論一般人が総力を挙げて千六百余種の昆虫が収集されたが、今事業はそれを上まわる二千四・五百余種二万個体を目標に行動が開始された。

教職という学校勤務の時間制限を受けながら、平日は放課後から明朝出勤時刻まで、バス電車で通勤可能な範囲を、土・日曜は足を伸ばして県境山嶽地帯まで、連日の採集行脚、文字通り山に伏し、野に眠った。若かった時とはいえ、３・４時間の睡眠だけでよくも身体が保ったものだと、当時の骨と皮の写真を見て感心させられる。

ある時は誘蛾灯の青色に目がくらみ、数十メートルの谷までころげ落ち、這いあがってまた採集展翅、また農家の作小屋でシラミの行列に遭遇し、ほうほうのていで逃げ出したり、墓参の道々にウマノスズクサにたむろするジャコウアゲハの群を追いまわし、３０数対に満足し、農夫より「そんなもの採ってもうかるかね。」と嘲笑をあびたり、スズメバチの巣作りの幾何学模様と、立体的建築構造の神秘さに感心させられたり、トックリバチの造形的な巣に見入ったり、樹草と昆虫・天候と昆虫の関係など、多々学ばされるところがあった。

また、当時の春山小学校同僚の諸に陽に物心両面での支援と担当学級の児童達の暖かい応援等あらためて感謝の意を表して筆をおく。

足羽小学校教諭

追　　記

現在博物館には、６２００余頭、３１６４種の昆虫が収集されている。これ等の貴重な標本は、坪田氏，井崎氏，塩田氏，下野谷氏等の手によって採集されたものである。虫のムシとまでいわれた塩田氏は昭和２９年に、井崎氏は昨年の夏に長逝された。坪田氏の稿の末尾に加えて、めい福を祈る。

小林　記